

# 英語前置詞 *with* と *mid* の競合的意味関係の 変化に関する整合的解釈

大 森 裕 實

## A Persuasive Interpretation of Changes on the Semantic Rivalry between *With* and *Mid* in English

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to make a persuasive interpretation of the transition of lexical meanings of the three prepositions: *wiþ*, *mid*, and *against*, through a revision of the model presented in Ohmori (1997) which tentatively explained the semantic *rivalry* among them. This newly revised model is appropriately prepared to describe the process of shifts in the semantic cline of the prepositions in details. On the basis of added linguistic data from MED and the Helsinki Corpus, this study reveals the linguistic fact that the preposition *mid* [+proximity] disappeared in the last half of the 14th century, which leads to the exclusively dominant prevalence of the preposition *wið*(*wiþ*) and the reformation of the semantic domains on the lexical scale: at one extreme the preposition *against* (< *ongean*) [+opposition] exists, on the contrary, the preposition *with* (< *wiþ*) [+proximity] exists at another extreme. What causes this shift will be inferred as follows: the phonological similarities between *mid* and *wið*(*wiþ*), and the appearance of Old Norse speaking societies in Britain in the late OE and early ME periods and the establishment of Modern Standard English in the late ME and early ModE periods. The former can be referred to as an internal factor to generate the driving force to promote the language change concerned, while the latter can be considered as an external factor to explain these phenomena from a socio-linguistic viewpoint. Especially

concerning the internal factor and its effects, it should be noted that the linguistic *drift* advocated by Sapir, which is probably inherited in the English language, plays an important role in the course of changes from OE through ME to ModE.

## 1. 序

英語史を瞥見するだけで、英語という言語が歴史的に大きな幾度かの「言語接触」と数多の日常的「言語接触」の繰り返しを通して、現在のような膨大な語彙をもつに至ったことは想像に難くない。英語が今日、国際共通語 (lingua franca) としての役割を担っていると仮定するならば、その版図拡大に英米両国の与えた政治社会経済的影響という言語外的要因とは別に、英語自体のもつ柔軟な語彙拡張という言語内的要因が関わっていることを指摘しておかねばならない<sup>1)</sup>。

英語の語形成 (word formation) を共時的観点から幾つかの型に分類して簡略に記述する (事例として各3語ずつ例示する) と、①合成/複合 (composition) : blackboard / worldly-wise / watertight ; ②派生 (derivation) : healthful / conformist / vaccinate ; ③混成 (blending) : smog / chortle / brunch ; ④頭文字 (acronym) : NATO / UNESCO / radar ; ⑤切り株 (clipping) : exam / math / coed ; ⑥逆成 (back formation) : edit / babysit / atuomate ; ⑦基体創造 (base creation) : lynch / sandwich / Kleenex ; ⑧擬声語 (onomatopoeia) : bow-wow / hurrah / tick-tack ; となり、その手段の幅広さを窺わせる。

また、通時的観点からの意味変化 (meaning shift) を類型化すれば (事例として各3語ずつ例示する)、①向上 (amelioration) : knight / fame / nice ; ②悪化 (pejoration) : knave / vulgar / silly ; ③一般化 (generalization) : bird / prayer / ride ; ④特殊化 (specialization) : fowl / hound / starve となり、こちらの事例も事欠かない。

ところで、上掲の意味変化と密接に関係するものが、言語接触における競合関係 (rivalry) の存在である。古英語 (Old English/Saxon: AD 450-1100) が経験した二大言語接触は、古ノルド語/北ゲルマン語 (Old Norse) と北フランス語 (Norman French) との接触であり、それがブリテン島の当該地域に二言語併用状態 (diglossia) を惹起し、結果、中英

語 (Middle English: AD 1100–1500) の語彙や統語の特徴へとつながっていく。本論考が問題とする英語語彙の *rivalry* については、古くは Rynell (1948) に OE 系の *nema/nimen* が ON 系の *taka/taken* によって駆逐された言語事実についての文献学的説明を認めることができ、また最近では Ogura (1981, 2002) の論文にその精緻な分析を看取することができる<sup>2)</sup>。ただし、いずれの場合であっても、内容語 (content word) を採りあげており、機能語 (function word) を問題にはしない。一般的には、他言語との接触に際して、被接触言語の特異性をもつ機能語にまで借入範囲が及ぶと想定することは難しい。しかし、古英語 (OE) の場合には、古ノルド語 (ON) との接触において、ゲルマン語というその近似性が起因となり、人称代名詞 *they*、接続詞 *though*、前置詞 *till / fro* (=from) 等の ON 語彙を OE 語彙に採り入れている。ON と OE の近似性については、二重語 (doublet) を考慮すればそれがよく分かるであろう (eg. OE-ON : *shirt-skirt / ship-skin / church-kirk / yive-give / whole-hale /&c.*)。

そこで、本論考においては、OE 系の前置詞 *mid* が ON 系の前置詞 *við* と同形の OE 前置詞 *wið* に収斂されていく過程について、大森 (1997) で提示した「意味領域変遷モデル」にその後の追加資料より修正を加え、より精緻で説得力のある説明を試みる<sup>3)</sup>。結果として、前置詞 *with* の意味拡張の推進力を生み出すメカニズムを明らかにするものである。

## 2. 意味クラインを形成する3つの前置詞 *mid / with / against* の語源

まず最初に、当該前置詞 *mid / with / against* の語源について、Partridge (1958, 1966<sup>4)</sup>、Onions (1966)、中島・寺澤 (1970)、Hoad (1986)、下宮・金子・家村 (1989) に加えて OED (1933, 1989<sup>2)</sup>、寺澤 (1997) の記述に基づき、その一般的説明を確認しておくことは肝要なことであろう。

① *mid* < OE *mid* (Du. *met* ; G. *mit* ; ON *með* ; Goth. *miþ* ; Gk. *μετά*)

※この単語は14世紀末までには *with* に取って代わられ廃語となった。

eg. And Ælperhelm earldorman gefeaht *wiþ* þa Deniscan on Port  
*mid* Dorsætum

'And earldom Æberhelm fought against the Danes at Portland  
with the men of Dorset'

(*Anglo-Saxon Chronicle*: anno 837)

- ② with < OE *wið* 'against' 'opposite' 'towards' 'alongside' ← *wiper* 'against' < Gmc \**wibrō* 'against' (Du. *wender*; G. *winder*; ON *við(r)*; Goth. *wipra*) ← IE \**wi-* 'apart' 'asunder' 'in half': Skt. *vitaram* 'further'

※原義は *withdraw*, *withhold*, *withstand* 等に残り、対立を表わす語 (*conflict*, *fight*, *war*) との共起の場合に窺うことができる。現在の意味は ME 期に Old Norse *við(r)* の影響で OE *mid* 'with' 'among' (G. *mit*; Gk. *μετά*) を吸収し、現代英語ではこれが主たる意味となった。意味の発達は Latin *cum* との連想によって助長されたと考えられる。

- ③ *against* < OE *ongean* 'in a direct line with' ← ON *gegn* 'against'

※まず *agen*, *ayen* 'again' が *to-geanes*, *to-yenes* (*to* は属格支配) の影響で属格語尾 *-es* を加え、さらに 14 世紀に語尾の *-es* が非成節的になった結果生じた *agens*, *agains* は南部方言で附加音 *-t* を加えるようになった (cf. *amongst*, *admist*, *whilst*)。これは (i) *-st* に終わる最上級との混同、または (ii) 異分析による。この *-st* に終わる語形の最初の例は *Layamon Brut* の Otho 写本 (c1300) に *agenest* として見出だされる。この語形は 16 世紀半ばには文語として確立した。

上掲の個々の説明からは、それぞれの前置詞の語源についての大まかな様相は理解できるが、*mid* が ME 後期に廃語となった事情や、*with* と *against* の意味の競合関係などを窺い知ることはできない。そこで、当該 3 前置詞に関して、OE 期・ME 期における意義素性とその具現化の実態を、文献に現われた事例分布とともに比較対照し、体系的に理解する事が必要になってくる。

〈大森 (1997) に一部加筆修正〉

### 3. 大森 (1997) 「意味領域クライン」の変遷モデルの修正

拙稿「OE・MEにおける前置詞 *wip* / *mid* / *against* の分布に関する語彙意味論的分析」(1997)を著わした時点では未刊で確認することのできなかったMEDの分冊W項<sup>4)</sup>を確認することに加えて、前出の論考(1997)では時間的事項からやむを得ず考慮外においた量的調査をHelsinki Corpus<sup>5)</sup>に依拠して行ない、簡素化して提示した「意味領域クライン」の変遷モデルを修正し、実態をより正確に表わすものにすることが可能となった。意義素性についても、統一的名称を与え、意味領域の分布を描くことが容易になるようにした。以下にその全体像を記述するが、具体的事例が大森(1997)と重複する部分については省略した。

#### 3-1. OEにおける意味の対極軸：ONGEAN vs MID

##### (1) ONGEANの意義素性と分布

###### ① 静的対立 [+OPPOSITION positional]

eg. *Min syn biþ symble ongean me*

‘my sin is ever before me’

(Ecclesiastical Institutes, I, 30)

###### ① -2: 意味の比喩的拡張 = 比較対照 (contrast, comparison)

###### ② 動的対立 [+OPPOSITION motional]

###### ② -2: 意味の比喩的拡張 = 時間の方向性・未来の出来事に対する心的態度の方向性

###### ③ 心理的対立 [+OPPOSITION psychological: hostility, resistance]

eg. *Ic ne mæg no wiðcwepan ne furþum ongean ðæt gebencan*

‘I cannot even have a conception contrary to it’

(King Alfred’s Anglo-Saxon Version of Boethius, 134: 29)

【分析】OEの前置詞 *ongean* の中核的意義素性は[一方的な(単一側面的)対立]にあり、本義的には空間的対立構造を示すと観察される。これが比喩的・心理的に拡張解釈されると、比較対照を、さらには抵抗や敵意を示す用法となる。

##### (2) MIDの意義素性と分布

###### ① 連帯 [+PROXIMITY association]

② 様態・附帯状況 [+PROXIMITY manner, accompanying circumstances]

③ 手段(具格的機能) [+PROXIMITY instrumentality]

【分析】OEの前置詞 *mid* の中核的意義素性は *ongean* とは対照的に[相互作用的近接性]にあり、前置詞意味領域クラインの対極に位置する。本義的には空間的同一方向構造を示すと観察されるが、これが心理的に拡張解釈されると、様態や手段を表わす用法に拡大していくことに無理はない。※ただし、ME期にはもう一つの前置詞 *wip* との競合関係から意味領域の変化を余儀なくされ、14世紀には廃語となる(→後段で検証)。

### 3-2. OEにおけるクライン二極の中間的位置: WID

#### (1) 前置詞 WID の位置づけ

前置詞 *wip* の形態はすでに語源についての記述箇所で言及したように、*wiper* 'against' の縮約異形態と考えられ、それがOE語彙形成の効果的な接頭辞として機能している様を *wiðcēosan* 'reject'; *wiðcwēðan* 'speak against'; *wiðfeohtan* 'fight against'; *wiðhabban* 'oppose, resist'; *wiðlicgan* 'oppose, resist'; *wiðsettan* 'withstand, resist'; *wiðstandan* 'resist, oppose'; *wiðwinnan* 'fight against' などによく看取することができる。これらの言語事実を一瞥すれば、*wip* の根源的意味は *ongean* と同様の[対立構造]の指標的役割にあるように判断してよからう。他方、*wiðhæftan* 'restrain'; *wiðmetan* 'compare with' などの存在を観察すれば、*mid* と同様の[相互作用]の指標的役割も初期の段階から兼ね備えていたと考えられる。従って、OEの前置詞 *wip* は、*ongean* を意味領域クラインの一端におき、同時に *mid* を同じクラインのもう一端に設置した場合に、その両極の意義素性を併せもった(北欧色の強い)前置詞として中間的位置を占めるように思われる。

そこでここでは、前節で分類・記述した *ongean* と *mid* の意義素性のそれぞれが *wip* のなかでどのように重複して具現化されているのかを観察し、*wip* 固有の意義素性を探ってみることにする。この調査において、新たに追加資料としたMEDの分冊W項の記述を参考にした。

#### (2) WID の意義素性と分布

① 静的・動的対立 [+OPPOSITION positional/motional]

MED 'with' 1a. Directly opposite to (sth.) in space or location, facing over against.

①-2 : 意味の比喩的拡張 = 衝突・敵意 (conflict, hostility)

MED 'with' 1b. (a) against (sb. or sth., God, the soul, etc.), in opposition to, with hostile intent toward.

(b) with expressions of arguing, debating, disputing, etc.: against

(c) with expressions of defending, protecting, resisting, warning, etc.: against

(d) with expressions of anger, hostility, envy, etc.: against

(e) as a remedy for (a pathological condition, disease, etc.): against

(f) in contrast to (sth.): over against, as opposed to

② 相互作用的对立 [+MUTUAL OPPOSITION inter-actional, compensational]

③ 近接関係 [+PROXIMITY association, inter-action]

MED 'with' 2.(a) In physical proximity to (sb. or sth., an animal, etc.), near, close to, beside, alongside.

【分析】①、①-2の意義素性はいずれも *ongean* の素性と重複し、また③の意義素性は *mid* の素性と重複する。③の意義素 [近接関係] に関する *mid* と *wip* の重複については Mitchell (1985:§.1198) の指摘する事例に認められる次のような極めて近接した位置での相互交換的使用から再確認することができる。

eg. Sy se awyred se ðe hæme *mid* his fæder wife

(Deuteronomy, 27: 20)

Beo se man awyred se ðe hæme *wið* nyten

(Deuteronomy, 27: 21)

しかし、*mid* の他の意義素性 (様態・附帯状況や手段を表わす具格的性質) を具現化する言語事例については、手元の資料から判断する限り、OE 期の *wip* には認めれないと指摘することができる。

従って、*wip* の初期的段階における意義素性は opposition 'against' と

proximity 'towards, alongside' であり、それがやがて比喩的拡張解釈を受けて、様々な relation を、特に [相互作用的關係] を意義素性に加えたという OED の説明的記述は一応納得のできるものであるということはあるが、この辺りの時間的経過については慎重な検討が必要であろう。結局、競合関係にある前置詞 *mid* とは異なる固有の特徴的意義素性を *wip* に認めるとすれば、それは②の MUTUAL OPPOSITION ということになる。

### 3-3. Helsinki Corpus から検出できる MID と WID の出現数と ME 期における競合関係の決着

	<i>mid</i> の出現数	<i>with</i> の出現数
ME I 期 (1150-1250) (113,010 語数)	654	638
ME II 期 (1250-1350) (97,480 語数)	141	541
ME III 期 (1350-1420) (184,230 語数)	2	789
ME IV 期 (1420-1500) (213,850 語数)	1	1,305

#### 〈ME I 期〉 (1150-1250)

	TOTAL	<i>mid</i>	<i>with</i>
CMPERIDI	7,188	70 (myd:5)	23 (wyð:17, wip:6)
CMVESHOM	5,865	43	9 (wið)
CMORM	8,845	0	92 (wiðð)
CMTRINIT	5,810	34	13 (wið)
CMBODLEY	5,903	72	6 (wið)
CMLAMBET	10,878	86	25 (wið:24, wip:1)
CMSAWLES	3,909	3	40 (wið:39, wip:1)
CMROOD	6,922	71	5 (wið)
CMANCRE	9,847	1 (mið)	83 (wið)
CMHALI	9,055	1	104 (wið)
CMVICES1	10,804	95	17 (wið)



英語前置詞 with と mid の競合的意味関係の変化に関する整合的解釈

COMPETERB	2,671	27	1 (wid)
CMBRUT1	11,989	143	20 (wid)
CMKATHE	5,084	3	62 (wid)
CMMARGA	5,023	3	59 (wid)
CMJULIA	7,347	3	79 (wid)

〈ME II 期〉 (1250-1350)

CMCOCU2	361	0	0
CMKENTSE	3,488	3	3
CMAYENBI	10,903	30 (myd:2)	45
CMBESTIA	4,231	14 (mid:2)	30
CMROBGLO	10,194	46	42
CMPOEMH	3,070	0	30
CMSELEG	7,063	3	38
CMMOON	336	1 (myd)	1
CMSIRITH	3,123	3	2
CMFOXWO	1,882	24	3
CMTHRUSH	1,118	1	11
CMBEVIS	6,307	1	87
CMALISAU	11,071	1	134
CMHAVELO	10,222	2 (mid:e)	97
CMHORN	7,261	12	1
CMEARLPS	16,989	0	0
CMPOEMS	1,560	0	17

〈ME III 期〉 (1350-1420)

CMDOCU3	15,563	0	78
CMASTRO	6,589	0	30
CMEQUATO	6,300	1	1
CMHORSES	6,568	0	103
CMPHLEBO	3,625	0	3
CMBOETH	10,109	0	12
CMCTPROS	9,009	0	24
CMNORHOM	7,424	0	63

愛知県立大学外国語学部紀要第39号(言語・文学編)

CMWYCSER	13,437	0	2
CMBENRUL	2,518	0	5
CMAELR3	3,141	0	1
CMPURVEY	3,033	0	17
CMCLOUD	15,689	0	13
CMHANSYN	8,107	0	67
CMPRICK	6,030	0	70
CMCTPROS	9,009	0	24
CMCURSOR	10,640	1	5
CMBRUT3	7,900	0	26
CMPOLYCH	6,105	0	10
CMMANDEV	5,446	0	29
CMCTVERS	7,023	0	45
CMGOWER	5,232	0	42
CMOFFIC3	4,986	0	22
CMOTEST	9,877	0	63
CMNTEST	10,978	0	34

〈ME IV 期〉 (1420-1500)

CMLAW	10,995	0	25
CMDOCU4	12,412	0	92
CMTHORN	5,814	0	80
CMREYNES	8,827	0	57
CMMETHAM	5,868	0	49
CMCHAULI	6,409	0	45
CMROYAL	6,316	0	35
CMCAPSER	1,505	1 (*myd)	11
CMMIRK	3,210	0	17
CMGAYTRY	5,248	0	45
CMINNOCE	4,232	0	16
CMFITZIA	5,800	0	9
CMAELR4	1,845	0	24
CMVICES4	7,187	0	62
CMKEMPE	9,916	0	1

英語前置詞 *with* と *mid* の競合的意味関係の変化に関する整合的解釈

CMJULNOR	5,054	0	33
CMHILTON	4,928	0	15
CMROLLBE	534	0	3
CMROLLTR	6,081	0	54
CMROLLPS	12,164	0	51
CMCAXPRO	6,190	0	13
CMCAPCHR	6,588	0	64
CMGREGOR	6,171	0	12
CMEDMUND	3,828	0	18
CMREYNAR	8,617	0	25
CMMALORY	11,467	0	89
CMSIEGE	7,638	0	65
CMLUDUS	3,478	0	34
CMMANKIN	3,687	0	40
CMTOWNEL	3,833	0	39
CMYORK	5,374	0	38
CMDIGBY	3,821	0	38
CMPRIV	19,577	0	100
CMOFFIC4	3,206	0	6

細かい統計処理をするまでもなく、この数値から明らかなことは、初期中英語 (ME I 期) において拮抗・競合関係にあった前置詞 *mid* と *wið* は中期中英語 (ME II 期) になるとその競合関係が崩れ、4 倍近くの頻度で *wið* が使用されるようになり、後期中英語 (ME III・IV 期：14 世紀後半) になると *mid* は姿を消失し、*with* のみが使用されるに至り、当該前置詞の競合関係に決着がついたと考えられる。

また、調査テキスト総語数に対する *with* の出現率は、ME I 期：0.56%、ME II 期：0.55%、ME III 期：0.43%、ME IV 期：0.61% という数値を示し、各採録テキストの語彙数にばらつきがあることを考慮しても、中英語期を通して *with* が比較的安定して使用されたことがわかる。

3-4. 前置詞意味領域クラインにおける変遷—— ONGEAN (>AYEN> AGAINST) / WID / MID の意味領域の通時的推移——

	OPPOSITION				PROXIMITY		
	psycho-logical	positional	motional	mutual	associ-ation	manner	instru-mentality
a					MID		
	ONGEAN				WID		
b					MID		
	AYENES				WID		
c					WID		
	AYENES						
d					WITH		
	AGAINST						

(1) [図(a)] (棲み分けによる3前置詞の均衡状態)

[対立関係] を表わす意義素を中核とする前置詞 *ongean* と [近接関係] を表わす意義素を中核とする前置詞 *mid* とが OE 期には当該意味領域における対極軸をなして、前置詞クライン上の意味領域の棲み分けを行っていた。すなわち、意味的な1つの分布尺度の端と端を占めていた。

また同時に、*wip* という前置詞も存在し、その意味領域は *ongean* と *mid* の中間的位置を占め、*ongean* や *mid* の意味領域との重なりがあった。特に *ongean* の意味領域と重なる部分も多く、例えば *mid* と *wip* とが共起する場合には、*mid stream* とあれば 'with the stream' を、*wip stream* とあれば 'against stream' を意味する<sup>6)</sup>。

(2) [図(b)] (*wip* の意味領域の版図拡張：*mid* との共存)

英語史(外面史)的観点からは、デーン人の侵入を蒙り、ブリテン島に北ゲルマン語地域社会が誕生し、後期古英語期から初期中英語期にかけて古ノルド語と接触したことが、ONの *wid* に酷似した *wip* (*wid*) という前置詞が浸透する要因となり、もともと中間的で緩い(広い) *wip* の意味領域が拡張した。新たに獲得した意味領域は、*mid* が担っていた領域。

それでは、なぜ *mid* の意味領域に対して版図拡張の方向性が生じたの

であろうか。その理由は大きく2つに集約される。

①影響を与えたと思われる ON *við* の意味領域が OE *mid* の意味領域と重複していたこと。G. T. Zoëga (1910) *A Concise Dictionary of Old Icelandic* に拠れば、ON *við* の意味領域は、OE *wip* の意味領域と OE *mid* の意味領域の全般にわたるものである。特に [手段] を表わす機能をもっていることは特徴的である。

②元来 *wip* の意味領域に *mid* の意味領域の中核的意義素性 [PROXIMITY association] (近接関係: 連帯) と重複 (近似) するところがあり、それが等価とみなされるようになったこと。

(3) [図 (c)] (*wip* による *mid* の駆逐と *ayenes* との棲み分け)

一定期間 *mid* は *wip* と共存した (拮抗競合関係にあった) が、やがては駆逐された。これは、OE *wip* が ON *við* に酷似していることから、一般的に、北欧系語彙 (*wið* = *við*) とアングロサクソン系語彙 (*mid*) が **rivalry** の関係にある場合にしばしば生じる傾向である。

第3-3節で確認したように、Helsinki Corpus に拠れば、OE 前置詞 *mid* は ME III 期 (14世紀後半) にはほとんど使用されなくなったことが証左される。

また、OE 前置詞 *mid* の消失により、当該前置詞意味領域クラインにおける分布均衡は二極の間に3項が共存する状態から2項二極化へと進む。その結果として、二極状態の均衡をできるだけ維持するために、*ayenes* が *wip* と重複する意義素性 [OPPOSITION positional/motional] (対立性) を専ら担い、棲み分けを明確にした。

(4) [図 (d)] (意味領域2項二極均衡化への修正)

最終的には、2項二極化の成った前置詞意味領域クラインにおける分布をよりバランスのとれたものに修正するため、元来は *with* だけが担っていた意義素性 [OPPOSITION mutual] (相互作用的对立) を *against* も担うことになった。

eg. *Leane thine aged back against mine Arme.*

(Shakespeare: I Henry VI, II. v. 43)

*Then ... shall he be set against a Brick-wall.*

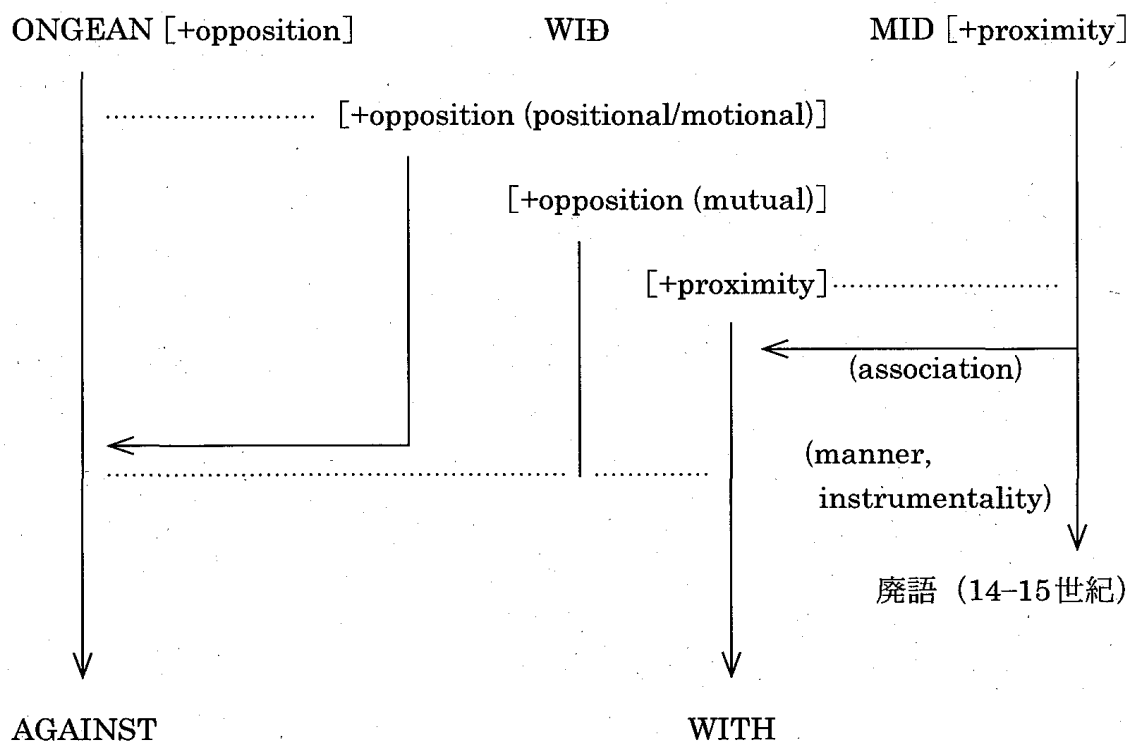
(Shakespeare: Winter's Tale, IV. iv.18)

*The trees ... darkly drawn against a bright orange sky.*

(D. Mitchell: Seven Stories, 211)

最後に、当該3前置詞それぞれの中核的意義素性が相互に関係を保ちながら通時的に推移していく構図を簡略に図解して参考に附す。

この相関図は、*wip* の意義素 [+opposition (positional/motional)] が *ongean* の意義素 [+opposition] に吸収され、さらには *wip* の特徴的意義素 [+opposition (mutual)] も ME 期には *ongean* に吸収されると同時に、*mid* の特徴的意義素 [+proximity] が *wip* に吸収されていく様相を示している。結果、ME 後期 (14世紀末から15世紀初め) には *against* と *with* の二極体系が構築されていく図式を端的に表わしている。



#### 4. 14世紀後半に *rivalry* に決着がつく社会言語学的要因

第3-3節で確認したように、Helsinki Corpus に拠れば、OE 前置詞 *mid* と *wip* の *rivalry* 関係は、ME III 期 (14世紀後半) に *mid* の出現がほぼゼロになることで決着がついたといつてよい。また、(採録文献資料に偏りがあることを承知したうえでの) OED の観察からも、*mid* [+proximity (association, accompaniment)] の最終例は “and so is man þat hæp hus mynde *myd liberum arbitrium*” (William Langland, *Piers Plowman* C-text 1393, xvii.: 182) ; *mid* [+proximity (direction)] の最終

例は “*peruore hi byepase þe wedercoc þat is ope þe steple þat him went mid eche wynde*” (Dan Michel, *Ayenbite of Inwyt* 1340: 180) ; *mid* [+proximity (accompanying circumstance, condition)] の最終例は “*þanne ich dar segge mid gode ry3te þat [etc.]*” (William Shoreham, *Poems c1315*, v.: 331) ; *mid* [+proximity (means/instrument)] の最終例は “*ase dop þise tavernyers þet uelleþ þe mesure myd scome*” (Dan Michel, *Ayenbite of Inwyt* 1340: 44) を確認することができる。それでは、その大きな変化を ME 期末に惹起せしめた要因とは何であろうか。

英語史において、14世紀後半から15世紀前半といえば、音韻上の一大変化である「大母音推移」(Great Vowel Shift) が始まる時期であり(18世紀頃まで続いた)、また、それから少し遅れて、統語上の特徴的变化である「助動詞 *do*」の使用も顕著になっていく(結果、1500年代に急増する)潮流を認めることのできる、まさに注目に値する時期である<sup>7)</sup>。

外面史的観点から分析すれば、この時期に「英語標準文語」の成立に向けての社会言語学的要因が存在するということになる。Crystal (1988) に依拠すれば<sup>8)</sup>、ME 期に大まかにいって5つ存在した方言(北部方言、中部西方言、中部東方言、ケント方言、南部方言)の中から、この時期には中部南東方言(正確にはロンドン英語)が標準英語としての地歩を固める潮流が生じ、15世紀末に向かって確立していく。その要因としては、①他の方言地域に比べて最大の面積を擁し、イングランドの人口の多くをかかえていた(→当該地域方言話者が多いことを意味する)；②三大都市が存在した(政治・社会の中心地 London と学問の中心地 Cambridge と Oxford；特に London に宮廷があったことが立身出世を望む人々にとっては魅力的であり、人口の集中を招いた)；③この地域の経済発展の基盤となった羊毛貿易の中心は London—Cambridge—Oxford を結ぶ肥沃な農業地帯である；④当該地域は北部と南部の中間に位置し、それぞれの方言を話す人々の意志伝達の架け橋の役割を果たした(→この点は当時の人々にも認識されていた様子で、John of Trevisa は1387年頃に次のような記述を残している：「中部イングランドの人は、まるで両端(北部と南部)の人々のパートナーであるかのように、北部の人と南部の人がお互いの言うことを理解するよりもはるかに、北部の人の言うこと、南部の人の言うことをよりよく理解することができる」)；⑤ William Caxton により活版印刷術が英国へ導入された(→英国最初の翻訳印刷業者 Caxton が基礎と

したのが当時の London 地域の話し言葉であった) ことを列挙することができる。

ここから推論できることは、「英語標準文語」の成立が、それまで比較的寛容に行なわれた異綴りを排除して、綴り字の固定化を推進し、音節構造と文字に極めて高い類似性をもった *mid* と *wið* (*wip*) の融合が図られたということであろう。

## 5. 結 語

本論考では、当該3前置詞の語源に関する一般的記述を再確認したうえで、古英語期における *ongean* / *wip* / *mid* それぞれの意義素性と分布状況について事例をあげながら分析記述し、*ongean* と *mid* とがクライン(連続変異体)の二極を構成している様態を追跡検証した大森(1997)の基本的構想を踏襲しながらも、MEDの新しい言語データや Helsinki Corpus に依拠した量的考察を視野に含めて、大森(1997)で提示した「意味領域クライン」の変遷について、より精度の高いモデルに修正することを試み、一応の成果は得られたと思われる。

当該3前置詞の意味領域全般の変移を推し進めた決定的要因が *wip* という OE 前置詞の意義素性と分布に潜在しているとの推論は、正鵠を射るものであるとの印象を強くした。事実、OE *wip* はクラインの中間的位置を占め、意味的にはやや *ongean* 寄りの[対立性]を中核に、*mid* と重複する[近接性・相関性]をも中心的意義素として兼ね備えた存在である。従って、*wip* を焦点化することにより、意味領域推移の輪郭は明瞭になるとの仮説は、古ノルド語の影響を蒙ったと思われる *wip* とアングロサクソン固有の性格を保持していると思われる *mid* との拮抗・共存の実態を言語事実に基づいて精査することにより、14世紀末から15世紀初頭にかけて両語の **rivalry** 関係が崩れて、その時期に OE *mid* が廃語に追い込まれる事態が生じたことにより証左された。英語の内面史的観点からは、話し言葉における音韻的(音節構造的)類似性、書き言葉における綴り字の類似性が *wið* (*wip*) と *mid* の意味領域等価の意識を助長し、両語の拮抗競合関係を経た結果、*mid* という語形が消失するに至る遠因となったと判断される。また、英語の外面史的観点からは、ME 期末から EMode 期にかけて、標準文語の成立過程にあったことが、異綴りを排除し、綴り



字の固定化、すなわち *wið* (*wip*) に一本化する潮流を生み出したのではないかと推測される。

加えて重要なことには、OE 前置詞 *mid* の消失は、当該の前置詞意味領域クラインにおける分布均衡に影響を与え、クラインの一方極のスロットにそれまでの *mid* に代わって *wip* が位置したため、*ayenes* が *wip* のもっていた意義素 [対立性] を吸収して棲み分けを明確にし、クラインのもう一方極に位置して分布均衡を維持するに及んだ。この構造が現代英語の *against* と *with* との意味領域の分布に繋がっていくと考えられる。現代英語の *with* の用法のひとつに、特定の動詞 (*battle*, *chide*, *compete*, *conflict*, *contend*, *dispute*, *fight*, *quarrel*, *strive*, *struggle*, *vie*, *war*, &c.) に附加して敵対・敵意を表わすのは、古英語時代の意義素の *residue* であろう。

「意味領域クライン」の変遷モデルに修正を加え、当該3前置詞の意味領域の推移について整合性のある解釈を行なった現時点において、当該3前置詞 *ongean* / *wip* / *mid* の弁別的意義素性の変化を誘発したものが何であるかを推論することが本稿の締め括りとなろう。それは、最も大きな枠組みでとらえるならば、意味領域における勢力分布のバランス、換言すれば、クラインの両極の均衡状態を維持する言語の保守的傾向といつてよい。サピア流の表現をするなら、言語の駆流 (<*drift*><sup>9)</sup> が機能した結果であるといえる。すなわち、OE *ongean* / ME *ayenes* がクラインの一方極に存在するという影響が、*wip* をしてその意味領域の重点を対極に位置する [近接性] へと向かわせる駆流を生み出す間接的要因となったと考えても、あながち標的外れではなからう。

最後に、本稿での議論はあくまでも、前置詞のような機能語 (*function word*) は内容語 (*content word*) からの *bleaching* を通して生成される文法化 (*generalization*) の典型であるとの前提に立つものであるから、仮に機能語が最初から機能語 (すなわち、「単なる容器」) であり、*with* の多様な語義も前置詞 *with* 自体の意味ではなく、それと共起する名詞の意味を統語的に表現する際の補助として具現化されただけのものであるとの見解に立てば、*mid* の担うべき意義素性を *wip* が吸収したとする構図は成立せず、*mid* も *wip* もどちらも固有の意味をもたない「単なる容器」であり、自己主張の薄い機能語の選択に変化があっただけの構図であると解釈できるかもしれない<sup>10)</sup>。確かにそれは *with* の多義性を一括して説明

できる主張となりうる可能性を秘めてはいるが、現在のところ本執筆者はその趣の見解には慎重な態度で臨まねばならないと考えていることを附言して、本稿を締め括ることにする。

※本稿は大森(1997)の承前(補遺)として著わした。そのため、一部に重複した表現が見受けられることを断っておく。

### 註

- 1) 英語自体の柔軟性の発現は言語政策によって左右されるところが少なくない。言語政策を担う「言語アカデミー」を設立しえなかった英国の事情とその代替的役割を担った Samuel Johnson (1755) *A Dictionary of the English Language* の意義については、次のように簡潔にまとめられる〈Baugh [永嶋訳] (1981), 小島 (1999) 参照〉。

いつの時代にも、またいずれの地域にも、言語変化を墮落と考える言語純粹主義者は存在するが、理性の時代18世紀英国におけるそれは「英語アカデミー」設立構想に代表される国語純化運動と関連をもつ。英国に先行して17世紀イタリアでは、1582年に創設されたクルスカ・アカデミー (Accademia della Crusca) がイタリア語浄化のために編集・刊行した『クルスカ・アカデミー辞典』(1612)が存在し、また、フランスにあっては1635年に枢機卿リシュリユーによって結成された小集団がフランス・アカデミー (l'Académie française) へと発展し、『フランス・アカデミー辞典』(1694)が出版されるという情勢にあった。この欧州大陸の言語アカデミー運動に感化されて、英語の綴字法・語法・文法を純化し保持しようとする動きが著名な文学者のなかに起こった。なかでも、ポープ (Alexander Pope)、アディソン (Joseph Addison) の他、デフォー (Daniel Defoe) は1697年に *Essays upon Projects* 『諸案試論』のなかでアカデミー問題を正面から取り扱いその必要性を説き、さらに機熟した1712年にスウィフト (Jonathan Swift) が大蔵卿オックスフォード伯に宛てた建白書 *A Proposal for Correcting, Improving, and Ascertaining the English Tongue* 『英語を矯正・改良・確定するための提案書』を著わす。この時期が英国における言語アカデミー運動の最盛期である。さまざまな議論を呼んだ後、アン女王の逝去により言語アカデミー設立の計画は頓挫することになる。当初は英語の固定化を標榜したジョンソンも『英語辞典』を編纂していく過程において、国家的な言語アカデミーを設立しなくとも、良質の『英語辞典』を作成すれば英語の墮落的变化を押しとどめることが可能であろうとの現実的思考(実

際主義)に修正したと考えられる。事実、『英語辞典』の「序文」のなかでは現実主義的態度を明らかにし、「万一アカデミーが設立されるようなことがあれば……権威への隷属が増大することを望まぬ私としては、イギリスの自由の精神がアカデミーを阻止し撲滅することを望む」と記して、英国流のよい意味での個人主義・実際主義を擁護している。その後、言語アカデミーにとって代わる組織が成立することはなかったが、結果的には、ジョンソンの『英語辞典』がある意味で言語アカデミーの役割を果たした、すなわち英語の固定化に寄与したと評価される。

- 2) Ogura, M. (2003) *Verbs of Motion in Medieval English* について詳しくは本執筆者による英文書評 (2006) を参照されたい。
- 3) 大森 (1997) 以後に論考内容について、言語データを追加し、「意味領域変遷モデル」に修正を加えて、「英語前置詞 mid/wip/against の分布をめぐる通時語彙意味論的考察——拮抗競合関係か相即相入関係か——」(日本英文学会第70回大会, 1998) と「前置詞 rivalry に決着をつける要因とは——OE 前置詞 mid の消失をめぐる——」(大阪言語研究会第148回例会, 2004) を発表した。
- 4) Hans Kurath & Sherman S. Kuhn を編集主幹として1952年から開始された *Middle English Dictionary* の分冊刊行は、大森 (1997) 執筆当時には T 項までしか既刊ではなかった。現在は分冊刊行を完了している。ここで参照する W 項は2001年には刊行された。
- 5) *The Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic & Dialectal*. のこと。8世紀の Cædmon's Hymn から18世紀初めまでの文献の中から400テキストを収録する1,572,820語の通時的データベース。ICAME Collection of English Language Corpora (= Brown Corpus, LOB Corpus, Kolhapur Corpus, Londn-Lund Corpus, Helsinki Corpus のセット) に収録され、利用可。このコーパスの問題点は、収録文献のそれぞれの語彙に文法範疇(名詞、動詞など)を示す標識 'tag' の附いていないこと。この欠点を補うべく 'tag' 付けしたものが、*The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English* (by Anthony Kroch) で、現在 Web 上に公開されている。
- 6) OED<sup>2</sup>, vol. 9, p. 737 (mid の項の語源解説) 参照。
- 7) 中英語 (ME) 後期から初期近代英語 (EModE) にかけて、現代英語の音韻や統語の諸特徴の萌芽が看取される。Topic in English Linguistics シリーズ (オランダ John Benjamins 出版社: 現在第52巻まで既刊) 参照。また、日本において、「近代英語協会」(『近代英語研究』を刊行) が1982年に創設されたのも、この時期に焦点をあてて研究成果を集中的に発表し、斯界に寄与する学会が従来存在しなかったことに起因する〔初代会長・荒木一雄 名古屋大学名誉教授 談〕。

- 8) David Crystal (1988), pp. 180–183参照。また、この Crystal の記述の妥当性については、久保内端郎他(編註)『英語史入門』(金星堂, 1993: p. 189)に厳しい指摘を看取することができる。本文②要因については「学問の府としての Oxford, Cambridge は古典語を重んじて英語を軽んじ、学問的著作はラテン語によるという習慣は標準語成立の後まで続くことを忘れてはならない」とあり、また、④要因については「北と南の中間に位置するというのも標準語の成立に寄与する要因ではなく、成立した標準語がたまたま中間に位置したということである。標準語が成立すれば地方の中心都市に修正標準語 (Modified Standard) を使用する人が存在するようになるのであり、この修正標準語が地方によって微妙に異なるというのが普通の考え方であろう」とある。さらに、⑤要因 Caxton 印刷との関連で ME を代表する Chaucer の言語の影響が過大視されることについては、永嶋大典(代表訳)『英語史』(orig. *A History of the English Language*) (研究社, 1981: §. 148)にも、「チョーサーの影響についても、同じように不確かなところがある。……官庁の記録および実務家の手紙と文書に用いられた英語は、チョーサーの詩の言語に大きく影響されたとは思われない」との指摘があることに留意されたい。
- 9) **drift** という術語は Edward Sapir (1921) *Language* の第7章および第8章で展開された、言語変化の原因を解明するための概念。駆流・偏流・定向変化と訳される。サピアは言語変化における二律背反の傾向(①個人的差異を消去しようとする統一的傾向; ②小さな集団に分裂しようとする分化的傾向)を **drift** という概念により同時に説明する試みを行なったといえる。言語は単に空間的に広がっているばかりではなく、自分自身の創る潮流によって時間を降っていくのであり、この力を **drift** (駆流) という。つまり、言語の駆流には一定方向があり、その方向は当該言語(方言)話者に無意識のうちに刷り込まれた当該言語の歴史に起因するものである。ここで推論した、意味領域クラインにおける二極バランスを維持しようとする傾向も、行き過ぎた変化を是正する「言語の駆流」のひとつであると考えられる。
- 10) 近代英語協会第23回大会(2006. 5. 19)における研究発表「Withの意味論」(加藤鉦三 信州大学教授)の主張。

### 参考文献

- Baugh, A. C. and T. Cable. 2002<sup>5</sup>. *A History of the English Language*. Routledge. (邦訳『英語史(第三版)』永嶋大典(代表), 研究社, 1981)
- Björkman, E. 1969. *Scandinavian Loan-Words in Middle English*. Haskell House Pub.

- Bosworth, J. and T. N. Toller (eds.). 1898. *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford U. P.
- Brunner, K. 1960/62. *Die englische Sprache: Ihre geschichtliche Entwicklung I-II*. Max Niemeyer. (邦訳『英語発達史』松浪有他, 大修館書店, 1973)
- Buck, C. D. 1949. *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages: a Contribution to the History of Ideas*. University of Chicago Pr.
- Burnley, D. 1992. "Lexis and Semantics," *The Cambridge History of the English Language II (1066-1476)*, ed. Norman Blake. Cambridge U. P.
- Crystal, D. 1988. *The English Language*. Pelican Books.
- Dekeyser, X. 1990. "The Prepositions WITH, MID and AGAIN(ST) in Old and Middle English," *Diachronic Semantics*, ed. Dirk Geeraerts. University of Brussels Pr.
- Gordon, E. V. 1957<sup>2</sup>. *An Introduction to Old Norse*, rev. Archer R. Taylor. Oxford Clarendon Pr.
- Hall, J. C. 1966. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. Cambridge U. P.
- Healey, A. and R. Venezky. 1980. *A Michofiche Concordance to Old English*. Centre for Medieval Studies, University of Toronto.
- Hoad, T. F. 1986. *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford Clarendon Pr.
- Kastovsky, D. 1992. "Semantics and Vocabulary," *The Cambridge History of the English Language I (the beginning to 1066)*, ed. Richard M. Hogg. Cambridge U. P.
- Kurath, H. and S. M. Kuhn (eds.). 1952-2001. *Middle English Dictionary (MED)*. University of Michigan Pr.
- Leith, D. 1983. *A Social History of English*. Routledge.
- Mitchell, B. 1985. *Old English Syntax I-II*. Oxford Clarendon Pr.
- 三輪伸春. 1995. 『英語の語彙史——借用語を中心に——』南雲堂.
- Mossé, F. 1952. *A Handbook of Middle English*, tras. James A. Walker. Johns Hopkins U. P.
- 中島文雄・寺澤芳雄 (編). 1970. 『英語語源小辞典』研究社.
- Ogura, M. 1981. *The Syntactic and Semantic Rivalry of QUOTH, SAY and TELL in Medieval English (Intercultural Research Institute Monograph 12)*. Kansai University of Foreign Studies.
- Ogura, M. 2002. *Verbs of Motion in Medieval English*. D. S. Brewer.

- 大森裕實. 1995. 「英語の言語変化にみる社会言語学的要因」『愛知大学外語研  
紀要』19.
- 大森裕實. 1997. 「OE・MEにおける前置詞 *wip / mid / against* の分布に関する  
語彙意味論的分析」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』29.
- Ohmori, Y. 2006. "Review: Michiko Ogura (2002) *Verbs of Motion in  
Medieval English*," *The Journal of the Faculty of Foreign Studies, Aichi  
Prefectural University* 38.
- Onions, C. T. (ed.). 1966. *The Oxford Dictionary of English Etymology*.  
Oxford Clarendon Pr.
- Partridge, E. 1966<sup>4</sup>. *Origins: an Etymological Dictionary of Modern  
English*. Routledge.
- Rynell, A. 1948. *The Rivalry of Scandinavian Native Synonyms in Middle  
English Especially TAKEN and NIMEN: with an Excursus on NEMA and  
TAKA in Old Scandinavian* (Lund Studies in English 13). Gleerup.
- 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎(編). 2005<sup>2</sup>. 『英語コーパス言語学(改訂新版)』  
研究社.
- Sapir, E. 1921. *Language: an Introduction to the Study of Speech*. Hartcort,  
Brace & Co. (邦訳『言語』泉井久之助, 紀伊國屋書店, 1957)
- 下宮忠雄・金子貞雄・家村睦夫(編). 1989. 『スタンダード英語語源辞典』大  
修館書店.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner (eds.). 1989<sup>2</sup>. *The Oxford English Dic-  
tionary*. Oxford Clarendon Pr.
- Stern, G. 1931. *Meaning and Change of Meaning*. Wettergren & Kerber.  
(rpt. Indiana U. P., 1964).
- 寺澤芳雄(編). 1997. 『英語語源辞典』研究社.
- Toller, T. N. (ed.). 1921. *An Anglo-Saxon Dictionary: Supplement*. Oxford  
U. P.
- Zoëga, G. T. 1910. *A Concise Dictionary of Old Icelandic*. Oxford Claren-  
don Pr.